誰かいませんか

吉田とし

COBALT・BOOKS

よしだ・とし

大正14年、静岡県富士市に生まれる。昭和23年、処女作「追憶に君住む限り」を出版。30年より児童文学を書きはじめ、37年第一回NHK児童文学奨励賞受賞の「巨人の風車」、42年小学館文学賞受賞の「じぶんの星」他、多数あり、ジュニア小説としては「青いノオト」「愛のかたち」、**コバルト・ブックス**に「海が鳴るとき」「この花の影」「ヴィナスの城」「たれに捧げん」「交響曲・ゴネリ」「稚くて罪を知らず」などがある。

誰かいませんか 0393-661084-3041

昭和46年5月10日 初版印刷 **定価360円**
昭和46年6月10日 初版発行

著者 吉田とし
編集 株式会社 サン・パブリシティ
東京都千代田区神田神保町1—29
電話 (294) 2781
発行者 陶山 巌
印刷所 大文堂印刷株式会社 錦印刷株式会社

発行所 東京都千代田区一ツ橋2—5—10 郵便番号 101 株式会社 集英社 電話 東京(265)代表6111 振替 東京15653番

©1971 PRINTED IN JAPAN 著者と了解のうえ検印を廃止します

誰かいませんか

吉田とし

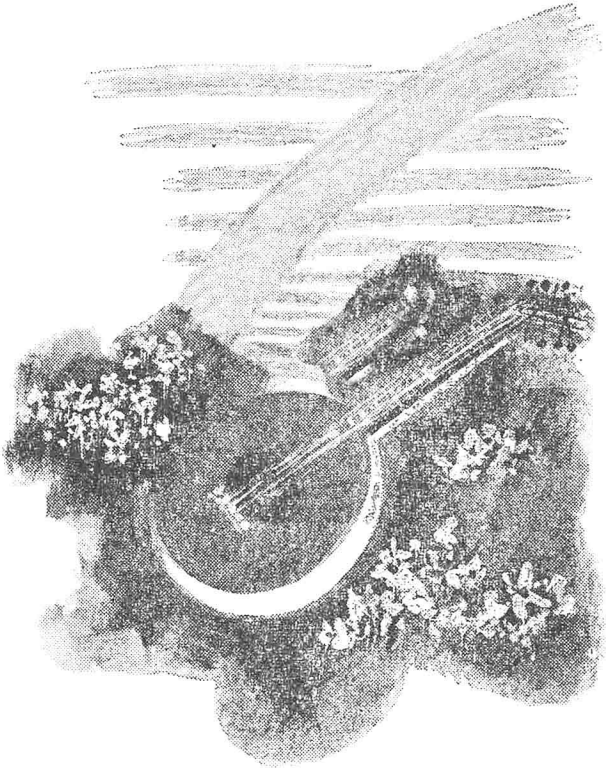
COBALT・BOOKS

0393－661084－3041

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

誰かいませんか

吉田とし



集英社

目次

誰かいませんか——♥

第一章　薄暮ゲーム　11
第二章　ポニーテールの依頼　23
第三章　ひとの恋ぶみ　31
第四章　何ができるか　44
第五章　大風のごとく　55
第六章　二枚の毛布　67
第七章　作戦計画　77
第八章　うそと真実の間　83
第九章　即席の宴　92
第十章　最後の一滴　105

第十一章　十八歳未満　121
第十二章　だれか、いませんか　127

誰もいませんか——♥

第一章　ある夜突然に　139
第二章　少女とタコとイカ　148
第三章　青いシャツの日　162
第四章　夜のホーム　175
第五章　朝のホーム　187
第六章　ちいさな空間　200
第七章　ホールの受付　212
第八章　ひとつの賭け　227
第九章　おばこ、くる　240
第十章　黒いひとみ　251

カット・秋葉　進

誰かいませんか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

第一章　薄暮ゲーム

おれが、同級の山岸謙治と尾形通子の結婚問題にくびをつっこんだ、そもそもの発端から、この話をはじめよう。

あれは去年の六月初旬、たしか雨の金曜日だった。

おれは放課後、校長室と職員室にはさまれた会議室に行っていた。

ある高校生雑誌の編集部から申しいれがあって、〝高校生に何ができるか〟というテーマの座談会があったためである。

大学を出て、まだ、二、三年とたっていないような編集部の人が、なかなかケッコウな司会をして、テープに録音した。

学校側からは、おれたち二年A組の担任で文芸部顧問の村松先生が、オブザーバーとして出席しているだけ。あとは新聞、文芸、放送の各部から、〝よくしゃべるヤツ〟が自薦他薦で集まってきただけあって、三時間近い白熱した会になった。

会が終わったときは、下校時のチャイムが、〝乙女の祈り〟をいのりおえてから、三十分も過ぎてしまっていた。

出席者のほとんどが三年生で、二年生はA組から文芸部のおれ、C組から新聞部の浜田幹子が、

あつかましくも顔を出していただけだった。
浜田とは、一年のときもクラスがちがっていたし、顔が合えばあいさつする程度だったから、会議室を出るときだって、べつに肩を並べて、ということはなかった。
浜田が、窓のそとがだいぶ暗いのを気にしている顔で、まっさきにへやからすがたを消したあと、おれは長い長い廊下を、ひとりで教室に向かった。
かばんとこうもりがさを残してきたからだ。
ここでちょっと説明しておこう。
おれたちの深大高校は、都下八王子市に所在する。
都内、都心の高校とちがって、かなり広い敷地を誇っているわけだが、約二万平方メートルの西南のかどに、鉄筋コンクリート三階建ての校舎が、カギのてに建てられている。
東側にはカマボコ屋根の体育館、北側の校門のそばに、三角屋根の時計塔がくっついた、陰気くさい講堂がある。
ところで、おれたち二年の四クラスは、南校舎の二階。A組は東のはずれ、ときている。会議室は西校舎の一階中央にあるから、両校舎のつなぎの渡り廊下を通ってはるばると往復するわけ。長い長い廊下、といったのも誇張ではない。
おれは南校舎にはいると、そのまま、夕やみにふちどられたひと気のない一階の廊下を、まっすぐ、突き当たりまで歩いて行った。
それから東階段を、二段ずつとばしてあがった。
もちろん、そのあたりも森閑としていた。
経験者ならわかるだろうが、二、三段おきにのぼれば、足音のほうはたたないもんだ。
べつに忍び足で歩く必要はなかったが、そのまま大股に、かつ物静かに、教室の戸口に進んだ結

果になった。
入口に立った。
二枚の引き戸が閉まっている。その上部にガラスがはまっている。
ガラスだから、教室の中が見える。
それでおれに見えたのだ。
男と女が、男子と女子が、つまりクラスメートにちがいない男生徒と女生徒が、教卓の前で抱擁しているのが、である。
おれ——河津典生は、はずかしながら一瞬鼓動がとまった。つぎにこの目をうたがった。
連日の夜食の即席ラーメンで体内の栄養のバランスがくずれたのか。それともわが性エネルギーが燃焼をおこたっているのであろうか。それともそれとも、接吻へのあこがれを、ついに幻影が描かせたのだろうか。……しかし、注意を集中してじーっと見なおしても、目の前のながめは変わらない。
おれは息をつめて、階段まであとずさりした。
泳がせた右手が手すりにさわると、なぜか、こうしてはいられない、と思った。
おれはサルのごとく、身軽く階段をかけおりた。
だらしなくも、脈搏がのどに突きあげていた。
大きくひとつ深呼吸して、おれはどこへ行くつもりなんだ？　と思った。職員室か？　なんで職員室へ行く必要があるんだ？　かりに行ったとして、だれになんというつもりなんだ？　「先生、たいへんです……」まさか！
第一、長い長い廊下を行ったりきたりしていてみろ、不始末のタバコの火なら派手に燃えひろがるってことはあっても、えんえんとキスを続けられるものじゃないだろう。呼吸困難にならあな。

あのまんま、身動きもしないで、立ちんぼうでいられるわけもない。手も足もしびれちゃってどうしようもないだろう。

そんなところへ教師をつれて、かけつけるなんて愚の骨頂。草葉のかげの近松門左衛門が、さぞかしおれをさげすむにちがいない。

おれは、おちつけよ、と自分自身をはげましてから、ふたたび手すりに手をかけて上をにらんだ。

三段とばして、音もなく二階にもどった。

意を決して、ふつうの足どりで戸口に行き、そして見た。

いぜんとして、ふたりはこりかたまっている。うごかないこと、ロダンの彫刻——ただし、やぼったい制服を身につけた——のようである。

おれはふと恐怖におそわれた。

わらわれるかもしれないが、あのふたりは死んでるんじゃないのか、というたがいが、一七六センチのこの身を、たてにつらぬいたのだ。

そばへよって、ちょいとつつくと、ゆらりとゆれて、ふたりは抱擁したまま、声もなく倒れかかってくるんじゃあるまいか……。

おれは戸に手をかけた。

なかばむちゅうで、力いっぱいひきあけた。

生きていた。ぱっと離れたのである。

反射的にこっちを向いていた。うすやみの中で、ふたつの顔がほの白く、おれを見た。

山岸謙治と尾形通子だった。

何かいわなければならない、と思ったら、ひとりでにことばが口をついてでてきた。しかし、奇

妙なことに、なんといったのか、全然おぼえていない。
「おじゃまします」だったか、「やあ、失敬！」だったか……。もちろん、「こんばんは」だの「ドッタノ？」なんぞとはいえなかったはずだ。
むこうは声を発しなかった。
そして、おどろくべきことに、謙治と通子のやつは、つぎの瞬間、おれという者から一メートルと離れないその場において、またしてもしっかりとおたがいの背に両手をまわしあったのである。
やつらが死んではいなかった、という安心感が、おれをおちつかせていた。冷静なおれは、ひとこといいたくなった。
「おいおい」
おれは山岸のひじをつついた。
「もういいじゃないか」
山岸はだまっている。
「野球だって〝日没ゲーム〟ってものがある。日が暮れたらストップするもんだ」
山岸は顔を通子の頭にくっつけたまま、てれくさそうな声でこたえた。
「薄暮ナイターだってあるぜ」
「ばかやろう！」
おれはどなった。
「いいかげんにやめとけ。なんだ、おまえら、てんで羞恥心ってものがないんだな」
「そんなことはない」
山岸は通子からうでをはなした。
そのしぐさがひどくやさしげに見えて、おれはハッと胸を突かれた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.